つちくれ

土塊

太田忠久

土塊（つちくれ）

太田忠久

三一書房

太田忠久
おおた ただ ひさ

1929年　岡山県に生れる
1942年　高等小学校卒
著　書　『米つくりの悲哀』（農業図書）
『むらの選挙』（三一書房）
『"たべもの"を求めて』（講座農を生きる　2）
第三章執筆——三一書房
『歴史をふまえて』（講座農を生きる　5）第六
章執筆——三一書房
現住所　岡山県阿哲郡神郷町釜村字田口

土　塊

1977年10月31日　第1版第1刷発行

著　者　太田忠久
©1977年
発行者　竹村一
印刷所　文栄印刷株式会社
製本所　山本製本所
発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台2の9
電　話 03 (291) 3131～5番
振　替　東京 9-84160番
郵便番号 101

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

土塊／目次

おれんの死 5
山の家 53
春の翳り 112
土塊 161
橋 216
あとがき 255

装幀・及部克人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

土

塊

おれんの死

一

その家は高い石垣の上にあった。とりでと呼ばれているのは、三方から築いた、がっしりした石垣の上にあって、砦をおもわせるからだともいわれ、また事実、昔、そこに砦があったからだともいわれていた。旧家であることはたしかで、一本の帯のように細くうねった川をはさんで、森の傍や、段々畑の端などに、庇の傾きかかった、萱葺の家がてんてんと立ちならんだ、小さな盆地の聚落の中では、ひと際目につく、立派な屋敷であった。

家も古びてはいるが、がっしりした造りである。庭には、百三歳になる村の古老が子供の頃から少しも変っていないという、梅と、栂の老木があった。ともに家に面した幹が割れて、空洞になっているが、それはこの家で、二度も火事に遭ったためだとつたえられていた。石垣は、野石をそのまま鑿も入れずに積んだもので、苔むし、つる草がからんでいて、暖かい季節には、その苔むした石垣の穴

に、鼠を呑んだ青大将が、いくつもとぐろを巻いて昼寝をしていた。ときには穴から穴へ、その大きな体をもてあました蛇が、天秤棒でも横たえたように、じっと動かないこともあった。

家は東南に向かっていて、陽向けがいいのだが、家路は西側に出っ張った丘陵と、東側からのび出した、荒神様の森の間にあって、いたって陽当たりがわるく、雨が降るといつまでもじめじめとぬかるんだ。土質もわるかった。粘土質の黒っぽくて、ほとんど石がなく、したがって排水もわるい。ことに晩秋から春先にかけて、霜が降る時期になると、路面の乾く間がなく、履物の裏に、一重、二重と泥がまみれついた。

おれん婆さんは、その泥濘の悪路を、毎日のように薪を背負ってかえった。荒神様の森の蔭を通り抜けたところから、間もなくとりでにのぼる、長い、急な段々になるのだが、おれん婆さんは、ただでさえ腰のかごんだ体に薪を背負い、すっかり二重になって、背中の荷物を左右に揺すぶりながら、喉笛のところをひゅうひゅう鳴らして、這うようにしてのぼっていくのである。

何分荷物が重すぎる。どうみても還暦を十年も前にすごした婆さんの荷物ではない。よくもあんなにおおくの薪が背負えるものだと思われるほどだ。それもおれん婆さんは、背板で背負うのではなく、にかおという藁でなった縄で背負うのだ。もっとも村には、荷物を背負うとき、にかおを使用するものがなくはなかったが、そうでなくても痩せて、骨と皮ばかりの婆さんが、一荷に余る薪を、縄で背中にくくりつけているのだ。にかおは皺だらけで、肉のかけらもない肌にくい込んで、肩から胸のあたりの骨が、ぎしぎし音を立てそうであった。

——何と因果な婆さんであろう。その重荷を背負ったおれん婆さんのかっこうをたとえるなら、「舌

切りすずめ」の物語りに出てくる、慾深婆さんが、重い葛を背負ってかえってくるのに似ていた。歯を喰いしばり、顎を突き出し、てっぺんの禿げた、白髪頭から湯気を立てている。もっともそれは表面のことで、内面はまったく異なっている。「舌切りすずめ」の婆さんは、ただ慾のために、重い荷物を背負っているのだが、おれん婆さんは、家人への面当——厭味のために、重い薪を背負っているのだ。

したがって、薪を背負って、いかにも苦しそうなおれん婆さんには、たぶんの芝居っ気がある。むろん荷物が軽いというのではない。たしかに重荷なのだが、おれん婆さんは、その年齢にしてはおどろくほどの力を持っている。天性の怪力とでもいうのか、七十年間、労働で鍛えかたまった体には、常人の想像も及ばないほどの力がひそんでいる。その証拠に、おれん婆さんが、人の目につきやすいとりでの段々を上るときと、人気のない山蔭の道を歩いているときとでは、足どりが違う。もっとも荷物を背負って、長い、急な段々を上るのは、おれん婆さんでなくとも、しんどいにきまっているが、彼女はその段々ばかりでなく、だれか自分の影を見ているものがあると知ると、ことさら苦しそうなかっこうをする。いまにもその場にくたばってしまいはせぬかと思うほどだ。猫被りである。それにおれん婆さんは、老いて目も、耳もおとろえているのだが、人が自分の影を見ているのを、不思議とよく知っている。動物のような鋭い勘でそれを見抜いて、いとも難儀そうなかっこうをするのだ。喉笛をひゅうひゅう鳴らすのも、持病の喘息や、にかおで胸を圧迫されることもあったが、半分は苦しみに耐えて働いている自分の姿を他人に見てもらうための、誇張である。

どうにもしようのない狸婆だといわねばならない。しかも、家業に精出すのではなく家人への当擦

りで、薪を負いに出かけるだけに、おれん婆さんは、家内で気に入らないことがあればあるほど、朝早くから起き出して、重い荷物を背負ってかえってくるのだ。

友也はその朝、いつもより一時間余りも早く目を覚ました。彼は心のやすらいでいないときいつもそうだが、睡眠と目覚めに距離感がなかった。気がついてみると、いつの間にか目が覚めているといった感じである。そんなときはきまって睡眠時間が少なく、熟睡もしていないのだが、それでいて少しも眠気がなく、頭も冴えていた。友也が今朝そのような目覚めをしたのは、やはり昨夜、祖母と不快な言い争いをしたせいであろう。

いったん目を覚ますと、容易に眠りにつけないのだが、昨夜寝つきが遅くて五時間ばかりしか眠っていなかったし、まだ起き上る時間でもないので、何とかひと眠りしようと布団を被って、無理に目をつむっていると、眠っているとばかり思っていた静恵が、電灯を明かるく切り替えて、床の上に起き上った。

「まだ四時を少し廻ったばかりだぜ！」

友也がいうと静恵は、額にかかった髪の毛を掻き上げながらうなずいて、

「もうとても眠りつけんから――」と、言い訳でもするようにいった。彼女の顔はひどく白かった。白いというよりも蒼かった。友也は黙って再び布団の中に顔を埋めたが、彼女が、そのように早く起き出そうとしている気持ちは、彼にもよくわかるのだった。

静恵は、昨夜、友也とおれん婆さんが激しいいさかいをしたので、今朝はかならず婆さんが早くか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ら起き出して、薪を背負ってくるにきまってるので、それまでに床を離れていようと思っているのだ。こんな朝に、うっかり朝寝をしていようものなら、床の中で、薪を背負って戻ってきたおれん婆さんが、軒端にその背負ってきた薪をおろす音と、その薪を背からおろすと同時に、婆さんが発する吐息とも歓声ともつかない奇妙な声をきかなければならない。いや、床の中できくどころか、これまで何度か、その薪を背からおろす、どさっ！という幅広い、地鳴りの音と、婆さんの奇声ではっと眠りを覚まされたものである。それは嫁の静恵にとってやり切れないものだった。

静恵が起き出してからも、友也はしばらく眠りつこうとつとめた。が、どうしても眠りつくことができなかった。目覚めた時よりも頭が冴えていくばかりか、その冴えていく頭が、時間が経つと、睡眠不足がよみがえるのか、ずきずき痛んでくる。勝手場の方からきこえてくる、ことことという物音も耳について、もはや到底そのままでは眠りつけそうになかったので、やがて彼も床を抜け出して、仕事着に替えた。

四月初めの朝にしては、ひどく寒かった。春はひと雨ごとに暖かくなるのだが、昨日の昼前まで降っていた雨で逆に冷え込んできたようだった。

「どうしたの、そんなに早う！」

彼の仕事着に替えた姿を見て、こんどは静恵が目を丸くした。

「苗代の土あげをしてくる」

「まだ暗いわよ、それに雨で土が湿っておるけえ土あげは――」

「できるよ、下の田圃は排水がいいけえ」

友也は無愛想にいって、長靴をはいた。

暗い農具室で友也は鍬とシャベルを探した。手さぐりでさがし当てた、鍬の柄の冷めたい手馴れた感触が、彼の体をひきしめた。

外はかすかな星明かりだった。彼も野良仕事にこんなに早く出かけるのははじめてである。やはり昨夜おれん婆さんと不快な言い争いをしたのがこたえているのであろう。彼もこんな朝はきまって、おれん婆さんが背負って帰った薪を背からおろす音を、寝床の中できいたものだが、今朝は違う。

庭先から段々をおりようとした友也は、はっとして足を止めた。段々の上り口のところに、黒いかたまりのようなものがうごいているのだ。「牛がいるぞ！」と一瞬思ったが、すぐに牛ではなく、それが薪を背負ってかえってくるおれん婆さんであることに気づいた。たしかにおれん婆さんに相違ない。闇の中で、黒いかたまりがのろのろ歩いているのは、まったく牛だが、牛がそんなところにいるはずがない。牛馬の放牧地帯ではあるが、放牧するのは八十八夜からで、まだ一ヶ月近く先だ。

友也はぞっとしながら思わず二、三歩後ずさりした。

今朝ばかりは、おれん婆さんの薪をおろす音と奇声をきかずにすむどころか、まだ出かけてもいないだろうと思っていた彼だ。この時刻に戻ってくるとすれば遅くとも三時には家を出ていなければならない。それはまったく人間業ではない。ほんとうに牛だ。いや、牛だってめったなことに、こんな時刻に出歩くものではない。

段々は、牛馬の歩行を考慮して、木で造ってある。石や、コンクリートで拵えてあると、急な段々では足を痛めるからだが、おれん婆さんは、その段々を跨ぐのがやっとの苦しそうな足どりで上って

くる。友也は狭い路で、おれん婆さんとすれ合うのが嫌なので、庭先で、上ってくるのを待っていたが、婆さんはいつもの勘で、彼がそこにいるのを知っているらしく、呻くような声をたてながら、のろのろと上ってくる。友也はやり切れなかった。彼はとうていそんなおれん婆さんに、労いのことばなどかける気になれなかった。

二

おれん婆さんは、友也にとって祖母ではあるが、血のつづきからすれば伯母だった。おれん婆さんたち夫婦に子がなかったため、おれん婆さんの実弟を養子にもらって跡を立てさせたのである。養子の順二とおれん婆さんは、五人姉弟の長姉と末弟であったが、それでも年齢はひと廻りしかちがっていなかった。したがって友也たちにとってはおれん婆さんは、若い祖母さんである。その若い祖母のおれん婆さんは、つれ合いと死別して二十年、養子夫婦や孫たちと同じ屋根の下で暮してきたのだが、彼女は決してわからずやの鬼婆ではなかった。気さくで、小事にこだわらないおれん婆さんは、何よりも家のためという一念でよく働いた。えてして実子のない老人は、口先はともかく真実家の将来を慮る気持ちに欠けていて、わが身ばかりを大事がり、家業をそっちのけにしやすいものだが、おれん婆さんは家が貧乏になってはならないと口ぐせのように言い、骨身を惜しまず働いた。野良の仕事ばかりか、孫たちもよく可愛がるいい婆さんだった。その婆さんが変ったのは、友也の嫁に母の芳子の姪に当たる静恵をもらったことにあった。おれん婆さんには、芳子の身内を家に入れたのが気に

入らなかったのである。

「わしゃあ家じゃあひとりもんだけえ」静恵が来てからのおれん婆さんは、とかくそんなことを口にするようになった。それでも順二の存命中は、何とかことを荒立てずにすんだのが、順二が亡くなると、もはやおれん婆さんの癖は、処置ないものになった。

「わしゃあもう家じゃあいらんもんだけえ」ふた言めにはそういうのである。そして彼女は、どうかすると当擦りをやり、家内のことを世間に吹聴した。吹聴するには真実のこともあることはあったが、たいていは偽りだった。もともとおれん婆さんは、口達者の方だし、世間ばなしも好きだったので、ささいなことに尾ひれを付けて、大袈裟にはなすことはあったが、根も葉もない偽りを、ぬけぬけと言い触れるようなことはなかった。

そのようなおれん婆さんの態度は、一家にとって頭痛の種だった。芳子や静恵は、何とかしておれん婆さんの気持ちをやわらげようとつとめたが、彼女の態度は一向に改まらなかった。改まるどころか、かえって、その気を使うことが、おれん婆さんの癖を煽り立てるような場合がおおかった。彼女の顔色がすぐれないので、うっかり「寝て休むがいい」などといおうものなら、当てつけていったといって、無理にでも外の仕事に出かけるのである。

友也はそのようなおれん婆さんに接するのが、ばかばかしくてたまらなかった。したがってなるべくかかわらないようにしていたが、しかし父が亡くなってからというものは、おれん婆さんに向かってもののいえるものは彼以外になかったのだから、一切かかわらないようにしているわけにはいかなかった。ある時は、近所へ持っていく祝の品のことで、ある時は畑に蒔く豆の品種のことで、以前な

ら、何でもなく笑って話し合えるようなささいなことから言い合いをして、時には両方で、幾日も口をきき合わぬことなどしばしばあった。

昨夜のいさかいも、因はささいなことからであった。同じ村の内に、おんじと呼ばれる家がある。おんじというのは、陽向けのわるい場所のことをいうのだが、その家は、北側の山蔭にあっていたって日受けがわるく、年中ほとんど太陽の光を浴びなかった。家も陰気でじめじめしているせいか、昔はその家に祟り狐がいるなどといわれたものだが、家の人もけち臭くて家内もわるく、ことに最近、家督相続のことから家内喧嘩の絶え間がなかった。夕食の後のことであったが、友也たちがその家の相続争いのことを話していると、出し抜けにおれん婆さんが鼻の先で嘲って、「家も喧嘩屋敷けえ――？」といったのだ。それは、まったく当てつけだった。友也はかっとした。

「おんじの家内話と、家のそれと何のかかわりがあるんだい」母や静恵のとめるのもきかずに友也は開きなおった。だが実際、この家が喧嘩屋敷だといわれていたことはたしかで、友也も知っていた。いや、それが真実だからこそ、友也も腹が立ったのである。

もともと友也の家は大塚という姓で、友也の祖父に当る栄三は、その大塚の二男に生まれたのだが、同じ村の中で、遠縁に当たる高木という家に子がなく、幼少の頃にそこに養子にもらわれていったのである。大塚は、近在では知られた資産家で、小作の四、五軒もあったのだが、五十半ばで後家になった栄三の父の弥平が、自分の子ほども齢の違う小作人の娘を後妻に入れたことから、跡取りである栄三の兄の大助との折合いがわるくなり、親子とも生傷の絶え間がないほど、摑み合いの喧嘩などして、世間の嘲いものになったのである。そして、そのために、多くの財産もがたがたに失い、跡

取りも家出してすでに家屋敷まで人手に渡ろうとしていたのを、他家に養子に行っていた栄三が買い受けて、高木の姓そのままに戻ってきたものである。「喧嘩屋敷」といわれていたのはつまりその時分のことで、おれん婆さんがいったのは、根も葉もないことではなかったのである。

「何をいうだえ、余所の喧嘩のはなしどころか、家も喧嘩屋敷だけえ、人のことをいいばじゃあないいうただ、それがどこがわるいんなら！」と、おれん婆さんも負けてはいなかった。

「それならそれで、何も奥歯に物のはさがったようなことをいわんでも、はじめからそういやあいいじゃないか、余所のことをいいばじゃあないとか、家が喧嘩屋敷だとかいうて、いまのその口のきき方は、自分が喧嘩を売っているようなもんじゃあないか！」友也もいつになく激しく、執拗だった。おれん婆さんもしばらくは、「本当のことをいうたがなぜわるいんなら――」とか、「わしをいじめようと思うて、あげ足を取ったんだろう――」とかいって、喰いかかっていたが、友也の権幕があまりにも激しかったので、しまいには、「わしが家におるのがじゃまだろう、おまえやあわしが死にゃあいいと思うとるだろうが――」といって、まるで手に負えない四つ、五つの子供のように、大声でわめき立てた。友也はそのようなおれん婆さんに、体のしんまで震えるような嫌悪をかんじるのだった。そしてその後で、いつもながら、自分も声を上げて、思いきり泣きたいような気持ちにおそわれるのだった。

おれん婆さんは、友也がいらいらするほど長い時間をかけて段々を上った。大きな荷物の下にふた重になって、地面を舐るようにしている婆さんは、さながらでんでん虫である。友也がそこにいるのを意識して、わざと手間どるのかと思ったが、かならずしもそうではない。重荷のために歩行がまま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.